

専修大学におけるオンライン授業の工夫例

Examples of Devices for Online Classes Implemented at Senshu University

関根純[†] 福原康司[†] 間嶋崇[†]
Jun SEKINE[†] Yasushi FUKUHARA[†] Takashi MAJIMA[†]

[†] 専修大学 経営学部

[†] School of Business Administration, Senshu University

要旨:

本稿では、専修大学において、新型コロナウイルス感染予防のために行ったオンライン授業に対して各教員が行った工夫例をまとめた。授業には、小規模な演習科目から大規模な講義科目まであり、また学生との対話の方法には、アクティブラーニングを取り入れた科目や、知識の伝達の後、質疑応答を行う科目もある。この典型的な例をいくつか抽出し、その工夫点について述べた。その結果、授業支援ツールの活用方法もさることながら、評価の方法や、オンラインであっても学生が興味を持つ授業内容のあり方などに工夫を行っていることがわかった。また、オンライン授業と対面授業では、互いにプラス面とマイナス面があり、オンライン授業を対面授業で置き換えることができる訳ではなく、むしろ補完する存在であることがわかった。

Abstract:

This paper proposes examples of devices for online classes implemented at the Senshu University. The implementations of online classes vary depending on class size, whether their learning styles are practice-based or theory-based, or whether they intensively use active learning methods. Different types of online classes are chosen and deeply investigated. The investigation has shown that assessment method of students, or even class contents should be devised for online classes, in addition to the use of education support tools.

1. はじめに

新型コロナウイルス感染症への対策のため、令和2年度より、多くの大学はオンライン授業を開始した。本学においても、これまで部分的にオンライン授業を実施した例はあったが、全学的にオンライン授業を実施したことはなく、どのようにオンライン授業を行うのが効果的かについては、各教員個別の試行錯誤によるが多かった。そこで本稿は、専修大学経営学部において実施したオンライン授業の典型的な事例を集め、そこで得られた工夫点を広め、参考にしてもらうことを目的にする。

2. オンライン授業の全体像

オンライン授業と一言で言っても、小規模な演習型の授業から大規模な講義型の授業まで多様である。また、教員と学生の対話をするにあたって、アクティブラーニングを主体に授業を組み立てるものもあれば、まずは基本的な知識を習得してもらい、その疑問点を双方向の対話で解消するものもある。そこで、本稿では、その組み合わせの中から、なるべく多様なパターンを示すため、次のような3つの事例を取り上げることにした。

事例1は、大規模な講義科目においてアクティブラーニングを実践したものであり、事例2は、小規模な演習科目においてアクティブラーニングを実践したものである。事例3は、大規模な講義科目において講義の後、学生の疑問を解消するため双方向の対話を行うものである。

それぞれの事例においては、①従来の授業でどのようなことをやっていたのか、②それをオンライン授業とするためにどのように工夫をしたのか、そして③そのために授業支援ツールをどのように活用したのか、を示す。

3. 事例1 (大規模な講義科目におけるアクティブラーニングの実践)

本章では、共著者の一人である福原が担当している「経営管理総論A (以下「管理論」と省略)」でのオンライン授業の取り組みについて、その特徴や課題について紹介していくことにする。

3.1. オフライン時 (従来) の実施状況

まず、平時において「管理論」なる科目で筆者が、どのような講義スタイルを採用しているのかについて、カリキュラム

の中での同科目の位置づけを踏まえつつ概説する。

3.1.1. 講義概要

本科目は、経営学部2年次における唯一の必修専門科目として配当されており、カリキュラム全体の中では「専門導入科目」に位置づけられている。したがって、3年次以降の専門科目へ橋渡しするために、経営学の全般的な内容を取り扱いつつ、古典理論を振り返りながら、その現代的な意義や意味を内省させることが目的となっている。2年次の全学生を5名の教員で担当しており、再履修の学生を含めると、1つのクラスサイズは150名前後になる。上述したように、1年次の入門科目から3年次以降のより専門的な科目へと繋げる重要な講義であるため、教える内容が担当者によって偏りがあってはならないという趣旨から、シラバスは担当者が個別に執筆することなく共通の内容にし、したがって講義内容や評価方法も共通化している。2015年からは講義担当者達で共同執筆・出版したテキスト(馬場他, 2015) [1]を使用し、講義内容の統一化をさらにはかっている。講義計画の時間的制約により同テキストの内容を講義内で網羅的に扱うことは難しいため、講義内容を補完するため、また経営学におけるテクニカルタームを正しく使いこなせるようになり経営学リテラシーを高めてもらうために、予め範囲を指定しテキスト内の太字になっている専門用語を中心に、用語理解のための小テストをすべての講義担当者が定期的に行っている。

3.1.2. 実施スタイル

筆者は5年ほど前から、「管理論」を含めた講義形式のすべての科目で、「対話」の場を設定するような講義スタイル、いわゆるアクティブラーニングを導入している。その背景には、近年の学習時間確保の厳格化という大学の講義を取り巻く環境変化に伴い、各大学で講義回数が増加したり、講義時間が延長されたりする状況に直面し、コンテンツ拡充の必要性に迫られていたことがある。また、経営に関する実務経験の乏しい学生達に、講義で学ぶ理論をリアリティあるものとして感得してもらうために、講義内容に関連する新聞・雑誌記事の配布や映像資料の視聴をそれまで行ってきてはいたが、その効果に手応えを感じられず試行錯誤を繰り返していた。とりわけ、専修大学ではまだ実施されてはいないが、当時非常勤講師を務めていた他大学での講義時間の100分化は、それだけでなく長時間一方的に話しを聞かされることに

退屈感を覚える筆者にとって、学生達の身に置き換えて考えてみると、何かしらの工夫を講義に取り入れないと、彼女・彼らが辟易することは容易に想像ができた。これら一連の出来事が、筆者をアクティブラーニングに誘う契機となった。

具体的な実施方法は、ある単元の講義を2回(週)で1サイクルとして回している。1回(週)目の前半はその単元の導入部分について説明し、後半は2回(週)目で説明する講義内容に関連するテーマ(問い)について、自主的に4-5名のグループを作らせ(メンバー数は3名以下や6名以上は禁止している)、グループワークとしてアイデアをまとめ、Padletというフリーで利用できる電子掲示板に投稿させる。2回目の講義冒頭では、投稿された各グループの内容の中から、講義内容に深く関連するアイデアや興味深いアイデアを投稿してくれたグループを適宜選出・紹介しながら、筆者からフィードバックを与える。その後、グループワークで考えてもらった内容の背景にある理論的な説明を行う。その際、パワーポイントを用いて説明は行われるが、スライドの重要な箇所を虫食いにした講義ノートを配布し、空所補充をさせる形でノートを取らせている。また、必要に応じてスライドに書き込んだり(したがってタブレットPCを使用)、ホワイトボードや黒板に書いたりして、スライドの情報を補足している。

なお、グループワークにきちんと参加しているかをチェックするために、グループワークの内容をPadletに投稿する際は、先頭行に任意のチーム名を書かせ、そのすぐ下に必ずメンバー全員の学籍番号と氏名を記載させると同時に、Responで出席の登録もしてもらい、両方に学籍番号・氏名があるかの照合を行っている。そして、グループワークを行った人を、授業貢献度(平常点としての出欠管理)があるとして評価している。また、グループワークに対するインセンティブとしては、フィードバックを受けたグループのメンバーは加点对象とし、参加者全員の前でアイデアが紹介されるという内発的報酬だけでなく、外発的報酬も付与している。

グループワークのテーマ(問い)は、例えばモチベーションの単元なら「メンバー各自の受験・部活・アルバイト等の経験の中で、これまで一番頑張れた状況を共有し、それらに共通する要因について考えよ」であったり、管理者が具備すべき管理原則の単元なら「部活やアルバイト先の嫌な先輩や上司の特徴とその対処方法について考えよ」など、学生達にとって身近なトピックスに設定している。どうしても身近な

テーマ（問い）を立て辛い単元，例えばコーポレートガバナンス（企業統治）等のグループワークの際には，事前に関連する新聞や雑誌の記事を配布し，予備知識を持ち寄ってアイデアを考えさせるような配慮をしている。

一方，グループづくりの方法は，教室のレイアウトに合わせて同じ嗜好やカテゴリー，例えば「最も好きな寿司ネタ」や「星座」等のエリアをパワーポイントのスライドでスクリーンに投影し，マグロ好きなエリアや蟹座のエリアに移動してもらった後，4-5名の，できれば男女混合のグループを自主的に作ってもらっている。こうした講義スタイルに不慣れた学生達は，最初は煩わしそうな面持ちで移動したり，友達どうしで固まって移動したりするような者も散見されるが，1ヶ月もすると慣れてきて，多くの学生が一人で積極的に移動しグループを作れるようになるのが例年の光景である。また，グループづくりにおいて，SAの介入が重要な鍵を握っていて，どうしても対人関係能力の低い学生にはSAがグループづくりのサポートをしている。なお，コミュニケーション障害のような疾患がある人に配慮するため，診断書を提出してくれればグループワークに参加する必要はなく，その時間帯は個人ワークを課すので，遠慮無く申し出て欲しいと伝えている。

3.2. オンライン時の工夫・変更点

オフラインでの講義が，このような定期的なグループワークを通じて講義参加者による知の共有をベースに展開されてきたわけだが，コロナ禍によりオンライン化を余儀なくされて，どのような工夫や変更をせざるを得なくなかったかについて次に触れて行くことにしよう。

3.2.1. グループビルディングの工夫

オンライン上におよそ150名もの学生達を1グループ4-5名で振り分けるとなると，30前後のグループを作らなければならない計算になる。これを毎回手動で行うのは至難の業なので，参加者を指定した人数でグループにランダムに振り分ける機能が備わったZoomを必然的に利用することにした（詳細は後述する）。そして，講義中はデータダイエットのために，マイクとカメラはオフにしてもらっていたが，グループワークの時だけは，相手の顔が見えない状況で対話が促されるはずもないので，必ずこれらをオンにするようお願いした。

グループワークの生産性をあげるための大前提として，グループビルディング，すなわちメンバーの関係性構築が肝要であることは，オフラインでもオンラインであっても言うまでも無い（香取・大川，2009）[2]。とりわけ，オンラインでは，物理的な空間を共有していないため，ノンバーバルコミュニケーションが難しく，自ずと初対面の人達との対話が上手く促されないことを筆者は危惧していた。そのため，グループワークに入る前に，例えば各メンバーを生まれた月日（あえて年は無関係にした）を最初に共有し，月日の早い順番もしくは遅い順番で，1) 名前と出身地を言い，2) この1週間で最も幸せ（あるいは不幸）に感じた出来事を端的に語り，3) 本日メンバーから呼んで欲しいニックネーム（他のメンバーがその人のニックネームを決めてあげるのもあり）を伝えること，というような簡単な自己紹介の時間を必ず設けるよう指示した。自己紹介が終わったら，他のメンバーは必ず拍手すること，また誰かが発言している時はオーバーリアクション気味にうなずくようにも指示し，承認欲求に訴えるアクションを取り入れることで，話しやすい雰囲気づくりを徹底させた。これらは，グループビルディングのための比較的オーソドックスな手法だが，とにかくグループワークを実り豊かなものにするには，対話が促される環境が不可欠であることを，グループワークの前に何度も強調して説明した。加えて，SAの学生にグループワークをしている各ルームを巡回してもらい，マイクやカメラをオンにしているか，グループワークに参加していない人がいないかをモニタリングしてもらった。

3.2.2. 用語テストの工夫

前節の講義概要でも触れられたように，オフライン時には専門用語の理解度を確認する小テストを定期的に行っていた。通常は10問出題し，各設問が文章になっていて，空所（括弧内）に最も当てはまる用語を記述させる形式としていた。しかしながら，オンラインによるテストは解答中の不正行為を防ぐ手立てがないため，テストではなくレポートという位置づけにしようというコンセンサスが，学期スタート前に本科目の担当者連絡会議で得られた。そこで，筆者は出題範囲の中で10の専門用語を選定し，その用語を一定時間と一定字数以上の制約を設けて講義内で説明させることにした。

1回目の用語レポートは，CoursePowerの「レポート教材」

機能を利用して、問題用紙を Word ファイルで配布し、15 分という時間制限および 40 字以上という字数制約を設けて行った。この際提出期限間際に提出が集中したため、CoursePower のサーバー負荷が高まったのか、10 名くらいの学生から提出できないとの問い合わせが続出し、メールでファイルを添付して提出させることで対処した。この 1 回目の反省から、2 回目の用語レポートは、Google Classroom の課題機能を利用し、Google Document による問題用紙の配付と回収を行った。こちらの方が高い負荷に耐えられるはずだと予想して利用したのだが、前回同様、提出期限間際に提出できないと訴える学生が数名出たので、メールでファイルを添付して送付するよう指示して対処した。なお、1 回目の時に時間が足りないという学生からの声が多く寄せられたので、2 回目は提出時間を 30 分とした。また、出題範囲のすべての太字になっている専門用語に対して、40 字以上の解答を事前に準備し、出題された用語に対して適宜転載するような学生も現れるだろうことを予測し、2 回目は 80 字以上という字数制約を設けて出題した。この結果、80 字に満たない解答を提出する学生が続出した。

3.2.3. 個人貢献度の評価項目の新設と工夫

共通シラバスの「成績評価方法・基準」欄には、期末試験 70%、授業貢献度 30%となっており、用語テストは授業貢献度の中に含まれている。そして、この評価ウェイトは講義担当者の裁量によって増減することができ、講義内で説明されることがうたわれている。筆者の場合、オフラインによる通常授業であれば、期末試験が 70%程度、用語理解度小テストが 10%程度、そして授業貢献度はグループワークをもって評価し、その評価ウェイトは 20%程度に留まる。GPA が導入され、各成績区分の割合が等しくなるような相対評価が必要になっているため、その学期の期末試験の平均点により、上記の評価ウェイトは変更している。しかしながら、オンラインによる期末試験は不正の監視が不可能なため、100%平常点(授業貢献度と用語レポート)で評価さざるを得なくなり、グループワークという授業貢献度の他に、個人貢献度を評価項目として追加することにした。

具体的には、グループワークを実施しない回に、「本日の講義で最も興味を持ったこととその理由を書きなさい」というリアクションペーパーのような講義感想を Respon のアンケート機能を使って提出させた。そして、その内容が優れてい

る人を選出し、回収した翌週の講義冒頭で紹介しフィードバックを与え、フィードバックを受けた人は加対象とした。しかしながら、この個人貢献度の評価方法は、途中から変更することになった。フィードバック対象者の選定のためにすべての感想を熟読しコメントを加える負荷が想像以上に高かったことに加え、明らかに講義に参加していないであろうとおぼしき感想が見え隠れしたからである。

そこで、個人貢献度は、講義にきちんと参加して内容を理解していないと解答することができない講義内容理解度小テストを、Google Classroom の「テスト付きの課題 (Forms)」機能を用いて行うことにした。毎回 5 問出題し、各設問が文章になっており、空所(括弧内)に最も該当する語を 4 つの選択肢から選択させる形式にし、5 分間という制限時間を設けて実施した。なお、オフライン時に配布していた講義ノートは、オンライン化に伴いスクリーンショットが自由に撮れてしまう状況下にあつて、わざわざ配布してノートを取らせる意義を見出せなかったため配布しないことにした。

3.3. オンライン化のための授業支援ツールの活用

本節では、講義のオンライン化に伴い、積極的に活用したツールを紹介すると共に、その有効性についても触れる。

3.3.1. Zoom 「ブレイクアウトセッション」機能

先述したように、本講義では定期的にグループワークを実施するため、150 名前後の学生達を 1 グループ 4-5 名になるようにグループを分けると、約 30 のグループをオンライン上で効率的に振り分ける必要があつた。専修大学では Google Meet の利用が推奨されていたが、Meet で 30 ものルームを事前にこちらで準備し、そこに学生達を振り分ける方法もできなくはないが、現実的な方法とは到底思えなかつた。そこで、こうしたグループの自動生成機能を持ったツールは、筆者の中で Zoom しかなかつたので、当初から他のツールは選択肢に入らなかつた(後に Cisco の Webex というツールが同様の機能を持っていることを他の教員から教えてもらった)。

Zoom には「ブレイクアウトセッション」という機能があり、1 グループあたりの人数を指定すると、自動的に参加者をその指定された人数で複数グループに振り分け、グループワークのためのルームを生成してそこに移動させることができる。この機能は非常に秀逸で、オフライン時には学生達に重たい腰をあげて移動させグループを作らせることにそ

れなりの時間を要していたが、この時間が圧倒的に圧縮できた。また、先述したように講義がスタートして間もない時期は、親しい友人どうしで移動する者がいて、自らの意志を持って一人で移動した人が、そうしたグループに入ると、当然ながら疎外感を覚え、講義感想には愚痴めいた意見が吐露されることが間々ある。ブレイクアウトルームは、グループのメンバーがランダムで抽出されるので、この問題を見事に解決してくれる。

また、興味深いことに、当初多くの学生がオンライン上での円滑なコミュニケーションに苦慮することを懸念していたのとは裏腹に、「普段対面でグループワークを行うと、緊張してなかなかうまく発言ができないけれど、オンラインだと緊張せずに発言ができた」という感想が少なからずあげられた。物理的空間を共有しないカメラ越しによる対話は、どうもデジタルネイティブな若い世代の気質のせいなのかは不明だが、対人恐怖症を軽減する効果があるかもしれないことを示唆する言説が得られた。

加えて、オフラインだと、グループワーク時に沈黙を続けてその場に居合わせフリーライダーが何となく許容されてしまう雰囲気が存在するが、オンラインだとある程度順番を決めて発言が求められる状況に直面するので、自らの発言を求められた時に何かしらの意見を述べないと、ある種の放送事故を起こすことになり、そのピアプレッシャーからか割合フリーライダーが抑止される傾向にあったようである。もちろん、中には端からグループワークに参加する素振りをまったく見せない酷い例も講義感想の中で報告されたりしている。オンラインだとそういう極端なケースは他のメンバーが相手にしようとせず放置され、本人もリアルな場に居合わせていないため無関心を貫けてしまう節がある。そういう学生は通常のオフラインでは、講義から次第に足が遠のいていくのかもしれない。

3.3.2. Google Document 「共有」機能

オフライン時のグループワークでは、CoursePower の「資料教材」の「外部資料追加」にグループワークの投稿先（前述の Padlet という電子掲示板）リンクを掲示しておき、そこにグループを代表して誰かがスマホや PC を使って投稿するケースがほとんどだった。しかしながら、オンライン時のグループワークは、筆者が Google Document の共有機能を使い、メンバー全員で文章を作成する方法をレクチャーしたとこ

ろ、積極的にこのツールを利用するグループが増えた。代表して投稿させられる人の負荷が軽減されると同時に、学籍番号や氏名の聞き間違いによる誤記がなくなり、グループワークの効率性が飛躍的に向上したように思われる。

3.3.3. Google Classroom 「テスト付きの課題」

オンライン化に伴い、グループに加え個人の授業貢献度も評価対象にし、その方法は講義感想を書かせたリアクションペーパーから途中で講義内容理解度小テストに変更した際に活用した Google Classroom の「テスト付きの課題(Forms)」機能を用いたことは既述した通りだが、このツールは導入してから評価プロセスを可視化できるという点において非常に有用であることが分かった。同機能を使った選択問題形式にすると、「解答集を作成」という項目があり、学生達が解答を送信すると、出題された 5 問中何問正解したか、結果が即時返信される。また、正解率や得点分布が自動的にグラフで示され、小テストを行った翌週の講義冒頭で振り返りが行い易い。このように自分がどの程度の得点が取れたかが、テストごとに毎回すぐにフィードバックされるので、評価の過程が可視化され、付けられた成績に対する納得感が高まるだろう。また、1 問につき 1 分で計 5 問を 5 分以内で解答させるという時間配分も適切だったようで、解答を友人達と共有するような不正行為ができる時間的ゆとりはなく、しかし選択肢が用意されているので、きちんと講義に参加しスクリーンショットを取りながら受講していれば、制限時間内にしっかりと正解に導けるテストだったようである。得点率の分布を見ても高得点者と低得点者がある程度分散していたし、毎回ある種の緊張感を持ってテストに臨んでいたことが講義感想からも見て取れている。

3.4. 小括

これまでの筆者の事例からも明らかなように、オンラインでのアクティブラーニング型講義は、ある程度オフラインと同等レベルで実施可能であることが分かったであろう。先述のように、期首は煩わしそうな顔つきで渋々グループを作りワークをする光景が例年目に飛び込んで来るが、Zoom のブレイクアウトセッション機能によりグループ作りのコストが圧縮されたことに加え、今年はコロナ禍により自宅での自粛生活を強いられた学生達が多く、初回のグループワークから「オンラインでも誰かと久しぶり話すことができるとても

楽しかった」という講義感想で溢れかえるものだった。また、何度か実施したオンライン講義への要望や感想のアンケート結果を見ても、オンラインでのグループワークは概ね好評だった。もちろん、意図が上手く伝えられずなかなか行間を埋められないオンラインならではの難しさや、講義内でせっかく繋がった人脈なのに継続的な関係になりにくいことを指摘し、可能であれば後期からはオフラインでのグループワークを切望する者も少なからず存在した。そして、オフラインでの講義を取り戻した時、一方的に情報を流すだけの講義であれば、オンラインのままが良い、ということに学生達や我々教員も気づいてしまったように思われる。

最後に今後の課題についていくつか指摘しておこう。まず、グループワークを実施する当日にテーマ（問い）を開示していたが、これは事前に発表した方がテーマ（問い）関連する情報や知識を持ち寄ってグループワークに参加できるため、フリーライダーの抑止効果が期待できるかもしれない。もちろん、事前にテーマを発表したとしても、怠惰な学生が情報収集してからグループワークに望むとは限らないだろう。しかしながら、心ある学生達からは、「沈黙してしまう人は必ずしも悪気があってそうしているのではなく、オンライン故に間の取り方が難しく、話すタイミングを逸してしまったり、あるいは知識のある人に圧倒され発言意欲が低下してしまう人もいるように思う」という感想を記述する学生がそれなりにいたことで気づいた。そして、沈黙する人から発言を引き出すようなファシリテーションの重要性や、知識の乏しい人のためにグループワークのテーマに関連する資料を事前に配布して欲しいなどの要望を記述してくる者がいた。オンラインでのグループワークは、もしかするとオフライン時よりもピアプレッシャーが強く働いているかもしれないことは既述した通りだが、そのプレッシャーが存在するおかげで、事前学習を促進する効果が期待できるのかもしれない。もちろん、オフライン時のグループワークでも、事前にテーマ（問い）を発表し、関連する資料を配付することが、フリーライダーを抑止し、グループワークをより意義あるものにしていくことは間違いない。

また、アフターコロナで仮にオフラインによる講義を我々が取り戻せた場合でも、オンライン化に伴い活用せざるを得なくなったツールを継続的に活用する意義を検討すべきであろう。本節で紹介した Zoom のブレイクアウトセッション機能は、オフラインであってもグループづくりの際に利用す

れば時間がかかり圧縮できるはずだし、親しい人と一緒に移動する問題を回避できる。Google Document も、グループワークのアイデアを電子掲示板に投稿させる際、メンバー全員に平等に投稿負荷を背負わせることができる。Google Classroom のテスト付きの課題は、オフライン時に紙媒体で行っていた用語テストの代替的ツールとして積極的に活用できるだろう。このようにコロナによる講義のオンライン化は、我々にオフラインでも利用可能な新しいツールボックスを気づかせるトリガーになったように思う。

最後に指摘する課題は、オンラインとオフラインにかかわらず、毎年筆者の頭を常に悩ませているものだが、学生達に講義で学ぶ理論を「自分事」のように考えさせるようなテーマ（問い）の設定方法についてである（安齋・塩瀬, 2020）[3]。経営学は本来ならすこぶる実践的な学問であり、だからこそ専修大学経営学部の教育理念として「理論と実践の融合」を長らく掲げている。この理念を学生達に浸透させるためには、学んだ理論を自分たちの身近な場で実践してもらわないことには始まらない。そのためには、グループワークを通じてグループメンバーと知のシェアリングエコノミーを享受するだけでなく、こうした理論に対する「自分事」への変換が不可欠なはずである。着手すべき課題は他にも山積するが、紙幅の関係からここでは割愛したい。今後も筆者の試行錯誤は続きそうである。

4. 事例2（小規模な演習科目におけるアクティブラーニングの実践）

本章では、共著者の一人である間嶋による「専修大学入門ゼミナール（以下、入門ゼミと略記）」におけるオンライン授業の取り組みについて見ていくことにする。

4.1. 専修大学入門ゼミナールについて

まず、入門ゼミとは、本学で全学的に展開される1年次配当の必修の演習科目である。経営学部では、1クラス約20名で構成され、28のクラスが編成されている。「転換・導入科目」という科目群にカテゴライズされた科目の1つであり、大学における学修とは何か、その意義や仕方（スキル）、学生生活の送り方、さらには専修大学そのものの理解を通じて、「生徒」から「学生」になっていくための入り口となる科目である。また、大学論（大学で学ぶ意

義) やアカデミックスキル, 専修大学の歴史, 図書館の利用法など, 教授する概要は全学共通で決まっている一方で, その具体的な教授の仕方は担当する教員の自己裁量にある程度委ねられているのも特徴である(表 4-1 参照)。それ故, 以下に示すものは, 一部を除き, あくまで本節の執筆を担当する間嶋担当クラス(担当した2つのクラス)における実施状況ならびに工夫ということになる。

さて, 今述べた教授すべき概要を具体的に遂行するために, 筆者はこれまでの通常の対面授業においては, 概ね以下のように同科目を実施してきた。すなわち, 本学の歴史や学生生活上の諸注意, 図書館の利用法については, 大学から提供された資料や図書館員によるガイダンスを利用し, 一方で, 大学論やアカデミックスキルについては, 専修大学出版企画委員会(2018)[4]を参考にしながら, 独自のコンテンツを用いて行なってきた。独自のコンテンツとは, 例えば, ペアないしグループで調査・議論・発表を行えるようなコンテンツや, 個人で新聞や雑誌, 論文などの文献調査・分析・発表を行うようなコンテンツなどである。その具体的な内容については, 次節でオンライン授業下での工夫と合わせて触れることにする。

また, 同科目は, 平常点で成績評価し, 具体的には毎回の提出物やプレゼンテーションの質などの課題への取り組み, ならびに質問などの発言頻度などのいわゆる授業貢献度から総合的に判断している。この成績評価の方法も全学的に統一されているが, 詳細については各教員の裁量に委ねられている。間嶋の担当クラスでは, 他者のプレゼンなどからも学んでもらうため, プレゼンはピアレビューすることにしてきた。

表 4-1 専修大学入門ゼミナールの講義計画

	講義計画
(1)	ガイダンス
(2)	大学論
(3)	専修大学の歴史
(4)	図書館ガイダンス
(5)	ノート、資料の収集方法の取り方
(6)	レポートの作成方法の説明
(7)	テキスト講読・プレゼン・議論(グループ1)
(8)	テキスト講読・プレゼン・議論(グループ2)
(9)	テキスト講読・プレゼン・議論(グループ3)
(10)	テキスト講読・プレゼン・議論(グループ4)
(11)	テキスト講読・プレゼン・議論(グループ5)
(12)	テキスト講読・プレゼン・議論(グループ6)
(13)	テキスト講読・プレゼン・議論(グループ7)
(14)	添削レポート返却, レポートの書き方の総括
(15)	これからの大学生活の送り方

出典: 専修大学 HP, 2020 年度電子シラバスより筆者作成。

4.2. オンライン授業にするための内容の工夫

さてこの入門ゼミも本学の他の科目同様にコロナ禍においてオンライン実施となり, Google Classroom と, Google Meet や Zoom などのビデオ会議ツールを併用して行われることになった。それに伴い, この状況に合わせた目的の追加が必要となり, また, オンラインツールに置き換わるだけでこれまでとほぼ同様の実施が可能なコンテンツと, 大なり小なりの内容の修正を要するコンテンツがあることがわかった。以下, オンライン化に伴い実施した同科目の内容上の工夫(目的や評価方法, コンテンツの追加・修正・刷新)についてみていくことにする。

4.2.1. 目的の追加

まず同科目の目的についてである。当時(現在でも), ほぼすべての1年生は, キャンパスに足を踏み入れた経験がなく, 友達を作るなどの縦横のつながりを形成することが難しい状況にあった。また, 地方出身の学生の中には既に一人暮らしを始めるものの, バイトも出来ずに家に籠ったままにならざるを得ない者もいた。そういった中, 学生の不安感や孤独感は計り知れず, その払拭なくして, 学修への前向きな態度ならびに大学へのコミットメントは得られないと考えられた。このことから, まず, 本科目の本来の目的に加え, それを促すためにも, 学生の不安感の払拭を目的に加え, 少しでもそれに貢献できる授業を意識することにした。このことは, 筆者の考えというよりも, 学部の本科目担当教員の間で事前に共有された意識であった。

4.2.2. 評価方法の修正

次に評価方法についてである。これは, ほとんど修正は行わず, 上述した従来通りの評価方法を行った。しかし, wi-fi や利用端末などの通信環境によって障害が生じ, Google Classroom やビデオ会議ツールへアクセス出来ない恐れも想定されるため, それへの配慮は行うことにした。幸い, 筆者の担当クラスでは, 通信環境に関する問題は皆無であった。

また, ビデオ会議特有の発言のしづらさを考慮し, 発言に関する評価を多少緩めると共に, 筆者担当クラスのルールとしてブレインストーミングなどで用いるルール(発言は

質より量、否定しない、アイデアを付け加えるなど)を初回だけでなく事あるごとに提示し、さらに、担当教員(間嶋)が率先してそれを笑顔で実践し、発言がしやすい環境を作るよう努めた。

4.2.3. コンテンツとその実施方法の修正・刷新

コンテンツに関連した工夫として、その内容そのものの修正や刷新と、実施方法の見直しとの大きく分けて2つの工夫を実施した。ここでは、まずほとんどのコンテンツに共通する実施方法の工夫部分について説明し、その後コンテンツそのものの工夫について触れることにしたい。

実施方法上の工夫は、概ね以下の4つである。まず、必ず顔出し(カメラオン)の時間を設け、クラス全員の様子が見える(共有できる)ように心がけた。またその際、プライバシーへの配慮からまずはカメラオフの状態から授業を始め、服装や背景などの準備のために、必ず顔出し機会の前にはそれを予告した上で短い休憩時間を取ることにした。次に、グループワークの機会には、いつも異なる人数構成ならびにメンバーでグループを編成するようにした。それは、ディスカッションや発表資料のまとめなどの協働やマネジメントの難しさやコツを学んでもらいたいという意図と、本講義が終わるまでに可能な限り多くのメンバーと話ができるようにという2点の意図からである。3つ目に、グループワークを行う際は、あえて時間を多めにとり、グループ内で十分な話し合いと雑談ができる時間を設けた。その理由は、オンライン環境下では、議論において対面よりもお互いの意思や意図が伝わりづらいようであることと、また通常なら授業前後に出来る学生同士の雑談も現状困難であるため、それぞれの不安や愚痴、逆に前向きな気持ちも含め、共有できる時間が必要だろうということからである。また当初は、急に初対面同士でグループワークを求められても戸惑うだろうと予想されることから、各グループに筆者も顔を出し、ファシリテーションを行った。最後に、対面状況でも実施していることだが、毎回授業終了後に振り返りレポートを記入・提出してもらうことにした。そうすることで、学修上の内省(今日の授業にどんな意味があったのかを捉え直す)機会を学生に与えると共に、教員側としてもレポートを通じて学生の状況が何となく理解できるのではないかと考えたからである。

さて、次にコンテンツそのものの工夫について説明して

いくことにしたい。繰り返しになるが、筆者の入門ゼミでは、通常、図書館の利用方法や専修大学の歴史、学生生活上の注意などについては、全学的に提供されているコンテンツ(図書館員によるガイダンスへの参加や大学の歴史に関する紙媒体ないし動画媒体による資料の提示など)を用い、大学論(大学で学ぶ意義)やアカデミックスキルについては、いくつかの独自のグループワーク・個人ワークを用いてきた。しかし、オンライン化に伴い、それらワークのほとんどにおいて大なり小なりの見直しや刷新が必要となった。以下では、筆者の実施した特徴的な7つの工夫について実施順に説明していくことにする(表4-2も参照のこと)。

まず、初回ガイダンスにおいては、履修など大学の学修上の注意や学生生活上の注意など各種注意事項の説明と共に、「モノ自己紹介」を実施した。普段から各種注意と自己紹介を初回に行っているが、通常は、各種の注意事項の徹底を重視し半ば一方的な講義になる回であった。しかし、先述した目的の見直しに伴い、今年度は、自己紹介も重視した。初回から心理的安全を促すことを意図し、またオンラインだからできるコンテンツをと考え、「モノを用いた自己紹介」を実施した。これは、自分の部屋にあり、自分を象徴するようなモノを1つ見せながら、2分以内で自己紹介をするというものである。アイスブレイクゲームの1つであると同時に、モノを用いるというプレゼン技法の学習でもある。

次に、さらなるメンバー間理解とアカデミックスキルの学習を目的に、「嘘つき自己紹介ワーク」を実施した。2人1組のペアを編成し、お互いの共通点3点と嘘の共通点1点を話し合いから考え、それをスライドに集約し発表させた。加えてこのワークは、嘘を巧妙につき、それを鋭い質疑応答で見破るというゲーミフィケーションでもある。対面時にも実施していたが、前節で示した理由からいつもよりワークの時間を多くとり、またスライドの共作を宿題にした。

3つ目に、「大学HPクイズワーク」を実施した。当初は、普段であれば実際に図書館で職員の方から学べる図書館利用法について、この状況下で楽しく学べる方法を模索していた。しかし、その中で、せっかくだから図書館だけでなく大学の様々な施設やサービス、大学そのものについて理解してもらおうと考えこのワークの作成に至った。このワ

ークは、図書館のOPACの使い方や電子ジャーナルの種類など図書館にまつわる知識のみならず、大学のこと（理念や学長の名前、歴史など）や学部の先生の専門分野、電子シラバスの使い方、キャリア形成支援課や学生生活課、セミナーハウス、保健室など施設やサービスの利用法、サークルの数など、本学ホームページを散策することで見つけられる情報をクイズにして20問出題、3,4名のグループを編成し、全問正解までの時間を競うゲーム形式で実施した。やや当て推量で20問作成したが90分で実施するにちょうど良い問題数であった。

次に、学生生活の理解やアカデミックスキルの習得を目的に、「先輩の話から大学を学ぶ合同ゼミ」を実施した。これは、留学経験や資格取得経験、サークルやバイト経験、就活経験そして大学で学ぶ意義・勉強方法などについて先輩（経営学部2-4年生）から講話してもらい、5名程度のグループに分かれ感想を言い合いながら質問を考え、質疑するという形式で行った。なおこの試みは、経営学部の入門ゼミ担当教員の中から発案され、全体に対して呼び掛け、希望するクラスが同じ曜日時限に開講する他のクラスと合同で実施した。いくつかの入門ゼミでは、以前から行われていたようだが、今年度はより重要な意味があると考え、担当者全員に呼び掛けがなされた。

5つ目に、大学で学ぶ意味の理解とアカデミックスキル習得を目的に、「ココがヘンだよオンライン授業」ワークを実施した。通常、筆者のクラスでは、大学を散策し、その散策や普段の学生生活で気づいた大学における問題とその解決策（文献サーベイを行いながら）を考え、スライドにまとめプレゼンするという「大学の問題発見・解決」ワークを実施していた。大学での学びにおいて自ら問題を発見する力は非常に重要であり、それを伝えるために行っている。学生たちは、お昼休みのコンビニの混雑や喫煙マナーの問題など、例年興味深い目の付け所と解決案を提示してくれる。しかし、この状況下では当然そのまま行うことは難しく、それに代替するワークを模索し、大学と学生の現状唯一の接点であるオンライン授業について考えてもらうことにした。また、これは教員の授業改善の参考にもなり得るし、学生の不満や愚痴そしてポジティブな面の共有にも繋がるだろうと考えた。4人1組のグループを編成し、オンライン授業のメリット・デメリット、改善策について話し合ってもらい、その後プレゼンを行った。

6つ目に、「流行研究」ワークを実施した。これも5つ目と同様に、大学で学ぶ意義とアカデミックスキルの習得を目的とし、このワークのみ、個人でのワークとした。過去3年程度以内に流行した製品やサービスについて「何が/いつ/どこで/誰に/どれくらい」流行り、それは「なぜ」なのか、新聞や雑誌、論文、公式サイトなどのサーベイを行いながらスライドを作成、プレゼン・質疑をするというものである。また参考文献の取り扱いなどについては、前出の専修大学出版企画委員会（2018）を参考にしよう指示している。このワークを通じ、研究の意義を伝えることも目的としている。例年も同様のワークを行っているが、これに関しては、内容上の工夫はなく、例年とほぼ同様のままで実施が出来た。強いてあげるなら、文献サーベイにおいて学生には「学認（学術認証フェデレーション）」の申請を事前に行っておくように指示をした点のみ工夫があったと言える。

最後に、「キャンパス模擬体験」を行った。上述の「ココがヘンだよオンライン授業」ワークにおいて、学生から上がった「キャンパスを一度でいいから散策したい」「実況中継してくれないか」というニーズを叶えるべく、筆者がキャンパス内を散策し、教室の様子など動画を撮影・編集し、それを視聴させた。

以上がオンライン化に伴う内容上の工夫である。次節ではそれを実施するためのツール上の工夫について説明していきたい。

表 4-2 オンライン化のための入門ゼミの内容上の工夫

目的の追加	新入生の不安の払拭への貢献
評価方法の修正	通信環境への配慮
実施方法の修正	カメラオンの機会
	毎回異なるグループ編成
	長めのワークの時間設定
	振り返りレポートの作成
コンテンツの工夫	モノ自己紹介
	嘘つき自己紹介
	大学HPクイズ
	先輩の話から大学を学ぶ
	ココがヘンだよオンライン授業
	流行研究ワーク
	キャンパス模擬体験

筆者作成

4.3. オンライン化のための授業支援ツールの活用

前節の工夫を実践するために、以下の6つのツール上の工夫を行った（表 4-3 も参照のこと）。

まず、すべての回においてビデオ会議ツールである Zoom を用い、ブレイクアウトセッションを使用した。グループワークを行うには、Zoom の同機能が非常に効率的である。なお、通信料についても考慮し可能な限りカメラをオフにし必要に応じてオンにした。

次に、Google Classroom を介して、教員による説明用のドキュメントやスライド、スプレッドシートなどを共有し、ワークの内容や発表の順番などいつでも見返せるようにした。対面時よりコミュニケーションに時間や手間がかかるため、また双方向型での実施ゆえの通信状況への配慮という観点からもそうした。

3 つ目に、振り返りレポートに、Google フォームを用いた。通常は紙で行っていたが、必要事項の記入漏れが少なく、また教員側も回収後の学籍番号への並び替えなど整理がしやすいためフォームを採用した。加えて、分量を求めるレポートではないという点からも適していると考えた。

4 つ目に、グループワークで全グループの議論過程を共有し競争意識を高めるための工夫として Google スライドを利用した。「ココがへんだよオンライン授業」において、グループの数だけページのある Google スライドをクラス全員で共有し、自身のグループ番号の書かれたページにグループで問題点やアイデアを書き込むようにした。こうすることで、周囲のグループの進行状況（論点やアイデアなどの書き込み状況）を見ながら、自身のグループの議論を進められるようにした。このアイデアは、本学の別の科目「リーダーシップ開発プログラム」内で本学キャリア形成支援課スタッフから教示いただいた方法でもある。

5 つ目に、すでに上述したが、学生に学認への申請を促し、大学の各種デジタルコンテンツにアクセス可能にした。これにより、学生がこのような状況下でも学術的な資料や専門的な資料に触れることがある程度可能になった。

最後に、キャンパス紹介動画作成のため、iPhone のカメラによる動画撮影ならびに Macintosh の iMovie を利用した動画編集を行なった。普段動画編集を行わない者でも容易に編集可能であった。ただし、画質を下げることで、Google Classroom を介した視聴が可能となるはずが、一部の学生が視聴できず、アップロード上のさらなる工夫が必要のようだ。

表 4-3 オンライン化のための授業支援ツールの活用

Zoom ブレイクアウトセッションによるグループワーク
Google Classroom による資料の共有
Google フォームを用いた振り返りレポート
Google スライドの共有による各班のワークの見える化
学認の申請
iMovie を利用した動画編集

筆者作成

4.4. 小括

以上のような工夫を行ったところ、最終回の振り返りレポートでは、アカデミックスキルの学修に対する評価（プレゼンテーションの仕方が習得できたなど）とともに、教員や同級生とコミュニケーションが取れたこと、大学のことがよく理解できたことなどについてポジティブな評価が得られた。また、後期はぜひみんなと会って同じ授業を受けたいなど、大学への前向きな気持ちの醸成が窺える回答も見られた。さらに、担当した 2 クラス共、ほぼ全員が全ての回に出席し、その結果、誰一人脱落することなく終了することが出来た。これらより、掲げた目的を少しは達成できたのではないかと考えている。

合同ゼミや大学 HP を利用したクイズなど、新たな取り組みの中には、対面になっても継続（あるいは対面仕様にながらの継続）出来る/しても有意義であろうコンテンツもあり、また、資料の共有や議論支援、レポート提出など、ツールとしても今後継続すべきものがあると考えられ、今後はうまくハイブリッド化していく道を考える必要があると考える。

しかし、一方で、Zoom や Google Meet では全員で議論することが困難であること、各種提出物の整理が難しいこと（例えば、クラスルームへのドキュメントによる提出物を学籍番号順に並べることが難しいなど）、課題も山積しており、さらなる工夫が必要である。

5. 事例 3 (大規模な講義科目における双方向対話の実践)

本章では、関根が担当している「経営情報論 A (以下「経営情報論」と省略)」でのオンライン授業の取り組みについて、その特徴や課題について紹介していくことにする。

5.1 オフライン時（従来）の実施状況

5.1.1 講義概要

経営情報論は、経営学部の2年次から4年次までを対象とする専門科目であり、1年次の時に履修した情報システム入門の知識を前提に、企業における情報システムやその構築方法について、事例を通じて、より深く考察した授業となっている。また、ビッグデータやRPAなど、最近流行っているキーワードについても、その目的や特徴について述べている。この授業は、どのような考え方に従って情報システムが活用されてきたのかを修得してもらうことを目的としており、How（技術等の詳細）よりも、Why（何故）やWhat（何を情報システム化したかったのか）を学んでほしいと、学生には強調している。令和2年度においては、200名を超える履修者がおり、その意味で、大規模な講義と考えることができる。

5.1.2 実施スタイル

このように情報システムに関する専門性が高い科目であるため、修得すべき知識が多く、HowやWhatに偏り気味となるため、毎回の小テストを重視し、Whyの部分を書いてもらうことにし、理解できていないと思う部分については、次の授業で振り返りを行った。さらに、身近な情報システム、例えば、アルバイトで実際に触れているPOSなどの情報システムを一つ取り上げ、その目的や、機能、抱えている課題、そして自分なりの解決策について考えるレポートを提出してもらっていた。

尚、授業スタイルという点について言うと、資料の説明は、PowerPointのスライドで説明していた。資料には、スライドの全ての情報が載っている訳ではなく、重要なポイントについては、自らスライドをメモし、しっかり覚えてもらうようにしていた。

5.2 オンライン時の工夫・変更点

オンライン化にあたっては、情報（HowやWhat）の提供に関する工夫、および何故（Why）の理解に関する工夫を行った。尚、従来の授業で実施していたレポートについては、オンライン時にも同様に課した。

5.2.1 情報の提供に関する工夫

従来、紙で行っていた資料配布は、授業支援ツールによ

るPDF形式のファイルの配布に変えた。配布は、授業の2日前とし、事前に勉強できるようにした。従来は5.1.2に記したように、学生に配布する資料と授業時に説明する資料には、敢えて情報量に差を設けていたが、今回はできなかった。

また、資料の説明については、別途、音声ファイルで事前に録音したものを配布した。資料と音声を別に分けた理由は、一緒にすると、データ量が分けた時に比べて倍増することがわかり、学生の通信料金への負担が高まることを避けたからである。また、通常の録音では、まだデータ量が多いと考え、圧縮ツールを使って、データ量をおよそ半分にした。この結果、20分で4MB（メガバイト）程度のファイル容量になった。音声ファイルは、履修する学生が疲れてしまわないよう、20分程度のものを3回に分けた。図5-1には、以上の状況を図示した。

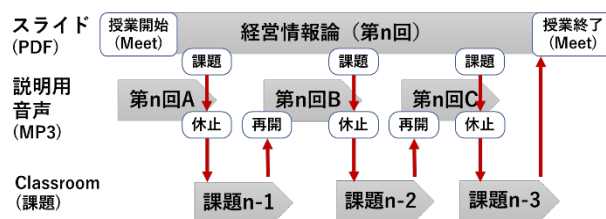


図 5-1 授業の構成について

5.2.2 何故の理解に関する工夫

従来の授業のように、毎回最後に小テストで理解を問うだけでは、足りないと考え、音声ファイルの切れ目毎に、課題を出すことにした。課題の内容は、Whyを問うものだけとした。

課題は、事前に配布するのではなく、授業開始直後に一つ出し、期限は授業時間内とした。その提出状況を授業支援ツールで監視し、およそ5割から7割の学生が提出できた授業開始20分から30分頃に、次の課題を出した。これも提出期限は授業時間中とした。最後の課題については、およそ授業開始後45分頃に出した。最後の課題については、課題の難しさによっては授業時間中にやりきれない学生がいるため、およそ授業終了後30分程度を提出期限とした。このように課題を少しずつ出す方式にした理由は、資料をしっかり勉強しないまま、課題だけこなすことを避けるためである。

最初の2つの課題については、当日の授業の最後にビデオ会議で簡単に振り返り、最後の課題については、翌週の

最初のビデオ会議において振り返りを行った。ただし、課題がむずかしく振り返りをやっても、学生がビデオ会議に参加できそうもない場合は、授業の最後の振り返りを行わない時もあった。これは、授業支援ツールへの回答の提出状況をみて判断した。尚、課題は、友達同士でのコピーを極力避けるため、選択式の設問ではなく、理由を書かせる記述式のものとした。

図5-2の(a)から(c)に、ある授業回において、3つの課題を出してから、回答が完了するまでの時間のヒストグラムを示す。また、3つ目の課題を提出し終わるまでの時間のヒストグラムを(d)に示す。従来型の授業において、一斉に課題を出して一定時間が経ったら次に進むのに比べると、課題をこなす時間にばらつきがあることがわかる。また、それぞれの課題を示してから極めて短時間で回答を提出している学生が若干名いるが、これは、資料を事前に読んできた学生と想定している。本来90分の授業を、早ければおよそ45分で終了している学生がいるが、平均的には、66分の時間をかけており、遅い学生は90分を超えて学習していることから、自分の理解力に合わせて学習できていると評価している。

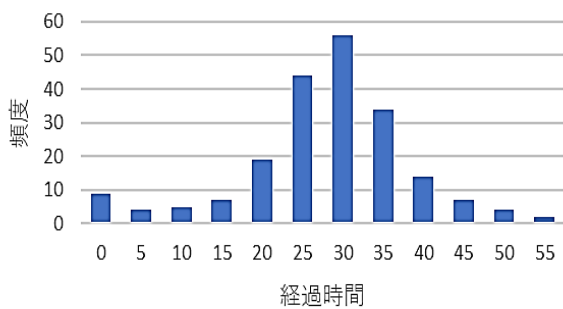


図5-2(a) 課題1の回答時間 (平均29分)

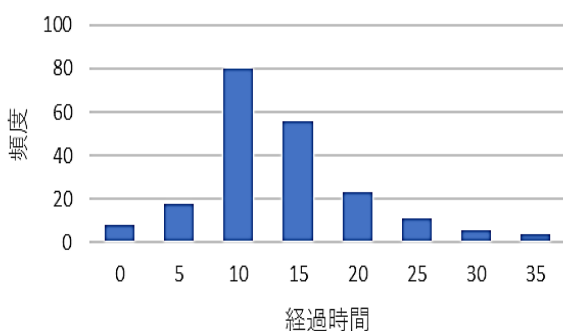


図5-2(b) 課題2の回答時間 (平均14分)

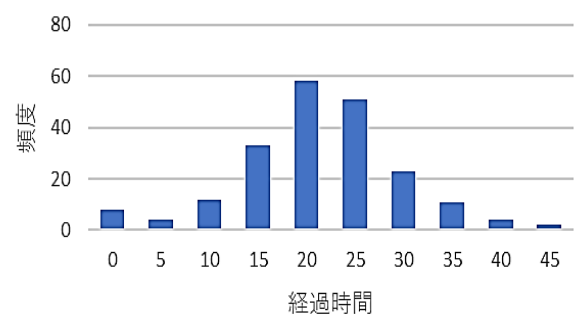


図5-2(c) 課題3の回答時間 (平均22分)

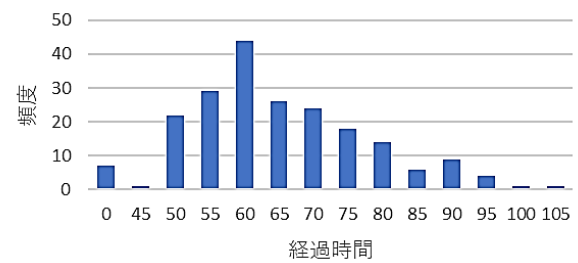


図5-2(d) 回答終了までの時間 (平均66分)

5.3 オンライン化のための授業支援ツールの活用

資料や課題の提示、課題の回収にあたっては、授業支援ツールの Google Classroom を活用した。また、振り返りのためのビデオ会議に、Google Meet を活用した。Google Meet については、履修している学生の置かれている通信環境、あるいはこの時期の日本のインターネット基盤の通信量が飽和しつつある状況も加味して、最初の5分、最後の5分のみ使用することにした。このような配慮をすべきことは、専修大学全体の方針でもある。

課題については、Google Classroom の「テスト付きの課題」の機能を用いた。Google Classroom には、「課題」の機能もあるが、「課題」の場合、それぞれの学生は、回答をファイルで提出するのに対して、「テスト付きの課題」の場合、複数の設問を設けることができ、かつその結果は、Google スプレッドシートに自動的に集約されて、学生が回答を追加する度に、リアルタイムで回答結果の行が増えていくところを観察できる。この機能を利用することで一定数が回答したら、次の課題を出すことができる。「課題」においては、「テスト付きの課題」と比べて学生がファイルを提出する際の操作性がわかりづらかったことも採用しなかった理由である。

結果としては、課題のとりまとめについては、従来の授業において、課題の回答が書かれた小テスト用紙を手作業で整理するよりも利便性が高くなった。

尚、学生に質問が生じた時に、どこに提示してもらうかであるが、Google Classroomの場合、「ストリーム」に質問を投稿することができるだけでなく、それぞれの「課題」や「質問」にも質問を投稿することができ、その全てを監視して、タイムリーに回答することは難しい。そこで、「なんでも相談室」という名前の「質問」を設けて、そこに一律に質問を投稿してもらうことにした。一般に、学生は、全ての履修者が質問内容を見ることができる「クラスのコメント」、あるいは投稿した学生と教員だけが見ることができる「限定公開のコメント」に投稿できる。後者を監視しておくことは、画面の配置上、難しいと感じた。

5.4 小括

授業を半期にわたって実施した結果の反省点について述べる。

まず、授業の情報量が多いため、それを吸収した上で3つの課題に回答するのは、学生には負荷が高かった可能性がある。このため、そちらに注力してしまい、十分な質疑応答というのには、足りなかった。また、質問をされた時、特に「限定公開のコメント」がされているのを見つけるのに時間がかかり、教員としてのレスポンスが悪かった。さらに、学生はオンライン授業が初めてということもあり、情状酌量した結果、出席がルーズになってしまった。授業開始後30分頃（ここに出欠投入の期限を設けた）に入ってくる学生が、後半になるほど増えた。後期の授業ではより厳しくしたいと考えている。最後に、Google Meetを一定時間使うと、途中で通信途絶する学生が出てくる。これらの学生への配慮をより一層すべきと考える。具体的には、録画をしておくことだと考える。同様に配慮すべき事項として、PCを持っておらずスマートフォンのみで授業を受けている学生が一定数いることがわかった。これについても、引き続き配慮が必要と考える。

尚、オンライン授業の特質として、次の点が従来の対面授業とは異なることがわかった。すなわち、従来の授業だと、過去の経験談など、記録には残したくない内容を話すことができたが、オンラインになってからは、録画されるかもしれないリスクから、一切話せなかった。これは、仕方がないことと考える。

以上の授業の結果、学生からのオンライン授業の評価については、以下の2点が得られた。一つ目は、毎回振り返

りを行ったことで、内容が理解できたということ、もう一つは、課題を授業時間外に持ち越すことなく、授業時間内に考えながらこなせる点であった。

6. まとめ

これまで挙げた3つの事例について、共通に見えてきたプラス面、マイナス面について、表5-1にまとめた。全体としては、以下のことが言えると考えている。

- 1) オンライン授業を支援する授業支援ツールの中には、対面においても利用でき、授業の効果を高めるものがある。対面授業においても活用することで、授業の効果を増すことができる。
- 2) 授業内容については、授業支援ツールの特質を活かして工夫すれば、対面に近い内容を維持した授業も実施できるし、対面以上に参加度を高めることも可能である。
- 3) その一方で、メディアとしてのブアネス（情報量、タイムラグなど）によるコミュニケーション上の問題も少なからずある。

以上のことから、オンライン授業は、対面授業と代替的と言うより補完的な関係にあると言える。仮に、オンライン授業から対面授業に戻った場合でも、従来と同じに戻るということではなく、オンライン授業のプラス面も活かした、ある意味ハイブリッド型の授業に転換していくことが、正しい方向であると言える。尚、授業品質がよく、学生に喜ばれるオンライン授業を提供するには、まだまだ工夫の積み重ねが必要であり、今後も精進していきたい。

参考文献

- [1]馬場杉夫, 蔡芒錫, 福原康司, 伊藤真一, 奥村経世, 矢澤清明, マネジメントの航海図, 中央経済社, 2015.
- [2]香取一昭, 大川恒, ワールド, カフェをやろう, 日本経済新聞出版社, 2009.
- [3]安斎勇樹, 塩瀬隆之, 問いのデザイン: 創造的対話のファシリテーション, 学芸出版社, 2020.
- [4] 専修大学出版企画委員会編, 新・知のツールボックス, 専修大学出版局, 2018.

表 5-1 3つの事例から見えてきたオンライン授業のプラス面, マイナス面

	プラス面	マイナス面
授業支援 ツール	<ul style="list-style-type: none"> Zoom のブレイクアウトセッション、Google Classroom の課題提出、資料掲出、共有などは、便利である。 	<ul style="list-style-type: none"> 大人数での議論は難しい。 学生の表情など、言葉にはならない微細なコミュニケーションはできない。 記録に残したくない微妙な内容は、オンラインで話すことにリスクがある。
評価方法	<ul style="list-style-type: none"> 小テスト、授業貢献度などの評価は、オンラインでも実施可能である。ただし、学生の目に見えない活動を把握するためのさまざまな工夫が必要である。 	<ul style="list-style-type: none"> 試験のオンライン実施は難しい。 小テスト等をこなしてはいても、授業に実質は参加していないと思われる学生がおり、そのような学生が出ないようにする工夫が必要である。
ツールの 対面での 活用	<ul style="list-style-type: none"> 課題提出、振り返り/ピアレビュー/小テスト提出、アクティブラーニングについては、対面授業になっても使える。 	